兵庫史を歩く　No. 44　　（2024. 2. 17）

史跡の町・播磨町を訪ねる

播磨町とは

　かつて播磨国といえば兵庫県の南西部に位置する大国であったが、今播磨の名を唯一冠する「播磨町」は県下で最も小さい町で、その面積の 3 割が海を埋め立てた人工島である。

　昭和 37 年（1962）までは阿閇村（あえむら）と称していた。

　「播磨国風土記」によれば、景行天皇が村を通行した際に村人が献上した「お食事（みあえ）」を食べたことから「阿閇の村」と呼ばれるようになったとか。

別府鉄道廃線跡（であいのみち）

　日本ではじめて化学肥料の生産を始めた多木化学の製品を輸送するために大正 12 年（1923）に別府鉄道土山線は敷設された。別府港と山陽本線の土山駅を結び、全長 4km であった。

　しかし時代の変化と共に輸送の中心はトラックへと移り、また国鉄末期の合理化に伴う貨物削減で立ちいかなくなり、昭和 59 年（1984）1 月末をもって廃止された。

　61 年の歴史をもつ別府鉄道廃線跡を播磨町が譲り受け、緑道「であいのみち」として整備した。（全長 1.3km　総工費 4 億 2 千万円）「歴史との出会いミュージアムロード」のコンセプトで、6 つのタイムトンネルゲートと歴史上の出来事を記した解説版、縁石には 25m ごとに 100 年さかのぼるタイルがはられ、大中遺跡までの 2000 年の時間旅行を楽しめる。

播磨大中古代の村（大中遺跡）

　昭和 37 年（1962）6 月、当時播磨中学校 3 年生であった 3 人の男子生徒により発見された。

　遺跡は海抜 16m 前後のゆるやかな台地の上にあり、発見されてから 20 回近い発掘調査が行われている。昭和 42 年（1967）に国の史跡に指定され、現在では「播磨大中古代の村」として整備

され、憩いの場として親しまれている。

大中遺跡は弥生時代後期（約 1900 年前）から古墳時代初期（邪馬台国卑弥呼と同時期）の複合遺跡である。甲子園球場よりわずかに広い 4,4000 平方メートルの公園内には 73 軒の竪穴式住居跡が発見されている。これは遺跡全体の 20%の面積での調査結果であり、遺跡全体をみれば、少なくとも 250 軒くらいの住居が建てられていたようである。

土器や鉄器ばかりでなく、中国との交流をしめす内行花文鏡の分割鏡が発見されている。また飯蛸壺や製塩用の壺なども出土している。

播磨では有力な村であったと推定される。

大中遺跡には多様な住居跡がみられる。それはなぜか？？

一般に弥生時代の村は同じような家が並び、一つだけ異質な家がある。それは村を支える産業が一つであり、村人全員がそれにかかわり、同じ文化を共有するからである。ところが大中遺跡は全く異なる。柱数で分けると、二本柱・四本柱・五本柱・六本柱があり、形では長方形・正方形・五角形等がある。まるで「弥生時代の住宅展示場」である。なぜか？

大中遺跡は一つの産業に集中した村ではなかったようである。海から 2～3km はなれているのに、飯蛸壺など漁業関係のものが多く、もちろん農業関連もある。一村一産業ではなく、小さいながらも「都市」のように、さまざまな産業があったようである。なぜ大中遺跡がそうなったか。その解明は今後の課題である。

兵庫県立考古博物館

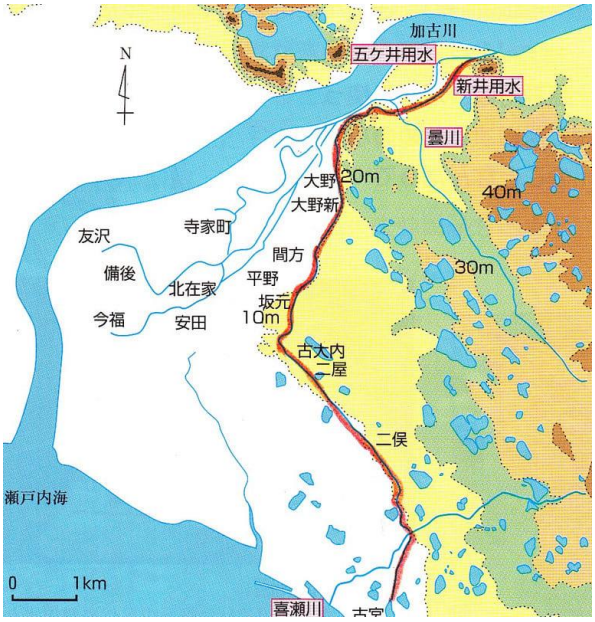
大中遺跡の南側にある博物館。発掘などの体験型のゾーンのほかに、兵庫県の歴史を「人・環境・社会・交流」の 4 つのキーワードで解き明かす展示室がある。試したり、触ったりすることで、考古学を身近に感じることができる。

播磨町郷土資料館

大中遺跡の出土品や弥生時代の人々の暮らしを展示紹介している。常設展では郷土の偉人のジョセフ・ヒコや今里傳兵衛、別府鉄道などの資料を展示している、

館の裏手には、廃線のなった別府鉄道のディーゼル機関車と客車を展示している。

新井用水（しんゆようすい）



かつて東播磨の沿岸部農民は水に恵まれず、度重なる旱魃に難儀していた。特に承応３年（1654）は大旱魃で田は地割れして苗も枯れてしまい、ほとんど米の収穫はなく、来年の種籾さえ無くなった。

古宮村（現播磨町）の大庄屋であった今里傳兵衛は、近隣の 23 か村の庄屋を集め、加古川から水をひく用水路計画を示し、みんなの同意をえた。これを基に姫路藩主榊原忠次に水路開発を願い出た。

翌年明暦元年（1655）工事は着手されたが、傾斜がほとんどない台地であり逆勾配があり、また日岡山山麓の堅い岩盤があり難航した。工事には藩内全域から 16 万４千人もの人足が集められ、傳兵衛も連日桧笠をかぶって水路を見て回り、夜も提灯をもって検分したと伝えられている。これにより工事はわずか１年余りで完成し、加古川大堰から古宮大池までの 14km を流れる用水路となった。この結果水路は 600ha の田畑を潤すようになったばかりでなく、ため池８つが不要になり、そこに新たに 6ha の田が新しく開かれた。

大中埋樋（おおなかうずみび）

フェンスに囲まれた見慣れない機械があるが、ここから新井用水が喜瀬川をもぐっている。用水路が川の下を通るための工夫がしてある。それは逆サイホンという技術である。

建設当初の喜瀬川のサイホン管は松材が利用され、「埋樋（うずみび）」と呼ばれていた。後には石造りに変わり、さらに昭和 32～33 年頃に鉄筋コンクリートになり現在に至っている。

傳兵衛をたたえる公園

古宮大池の南側に今里傳兵衛を讃える顕彰碑や記念碑などを集めた公園がある。

ジョセフ・ヒコ（1837～1897）

天保 8 年（1837）に播磨町古宮で生まれた。幼名は彦太郎、長じて浜田彦蔵と名乗る。

13 才の時、江戸から「栄力丸」で帰る途中、遠州灘で暴風雨に遭い遭難、船は難破し、太平洋を 52 日間漂流した。アメリカの商船に救助され、嘉永 4 年（1851）乗組員 17 名はサンフランシスコの港に到着した。1 年余滞在の後一行はハワイ・香港を経由して帰国したが、彼は希望して再度アメリカに渡った。地元の実業家の支援もあり、カトリックの学校で学ぶと共に、洗礼を受けた。その一方で日本人として初めてアメリカの市民権を取得した。

1859 年に神奈川領事館通訳としてハリスに伴われて 9 年振りに帰国した。2 年後また渡米し、日本人として初めてリンカーン大統領と会見する機会に恵まれた。民主主義に共感した彼は望郷の念と開国した日本への熱き思いから再び帰国を決意する。

「新聞の父」

領事館勤務を 1 年ほどでやめたジョセフ・ヒコは元治元年（1864）6 月に日本で初めて新聞を発行した。外国の新聞を翻訳したもので、半紙 2 枚を一部として販売した。これが「海外新聞」（当初は「新聞誌」という名であった）で、定期購読者は 2 名だけで、全部で 100 部程度発行していた。26 号で廃刊となったが、これまでの瓦版とは異なり、本格的な新聞であった。子供にも読まれるようにとの編集方針や、18 号からは広告を記載するなど、開拓精神に満ちた新聞づくりは現在の新聞社の土台を築いたものとして、多くの人に受け継がれ、「新聞の父」と呼ばれている。

（次回予告） **2024.3.16**

兵庫史を歩く No.45　「福原遷都」とは一体なんだったのか？

平清盛の夢の跡をめぐる　その 1